

平松洋子

●リレーエッセイ

豊崎由美

岡崎武志

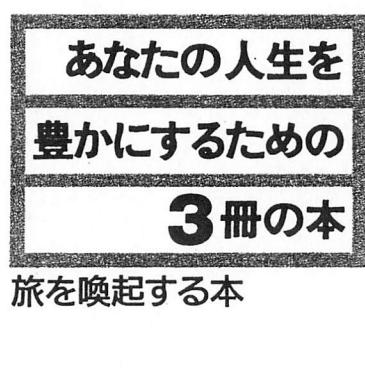
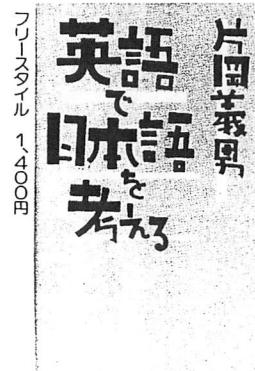
平松洋子

萩原基子

たった今インドから戻ってきた。旅に出て十日めの昼下がり、ガンジス川のほとりで立ち飲みしたチャイが炎いのかどうかは知らないけれど、突然その夜からおなかがさきゆうつと疲れ始め三日めの今日になつてもまだ治らない。

大通りのまんなかにどつしり居座る牛の群れ。金銭が絡むときの執拗な駆け引き。狂ったように炸裂するクラクションの洪水……混沌のなかに投げ込まれて平衡感覚を失い、呆然と立ちすくむ。それは、インドを訪れば誰もが必ず味わう奇妙な感覚だ。「いつもの常識」や「物差し」は赤子の手をひねるように崩される。ナショナリズムやアイデンティティの研究者として知られる気鋭の社会学者、小熊英二氏もまたそのひとりであった。二ヶ月の初滞在体験を緻密に捉え綴ったのが『インド日記 牛とコンピュータの国から』。

若き社会学者は牛が居座る大通りで、ラウドスピーカーが説教をがなりたてる極彩色の寺院で、笑いと喝采渦巻く映画館で、インドそのものを鏡にしつつ自らを問い直していく。凡百のガイドブックより、日記形式を借りたわずか一冊の考察録のなんと豊かで鋭利な文化案内！私はこの一冊を携えてインドを旅しながら、たとえばヒンドゥー教と私たちの暮らしを比較考察した一節を前にううむと唸つた。「勉強し、生産しないなれば、人生は無に等しいといふ観念」から、私たちは逃れることができるのがどうか。この「自由の重荷」から私たちは解放されることができるのだろうか。この「自由の重荷」旅に出るときは、こんな本も頭のなかをチエンジアップしてくれる。



現地での体験、チエンジアップのきっかけ、旅から受け取ることは、どんなものであれとても大きい。

片岡義男著『英語で日本語を考える』がそれだ。ふだんするりと口にしているけれど、そこには言いたいことや感情がありますところなく表現されている、そんな日本語を英語でいうとなつたらこんな言い方をすればいいんですよ。著者は仔細に解題する。たとえばわがニッポン人がつい口にする「ハウ・マッチ」は「錢なんば」というような言い方だに相当する。少々奥ゆかしさをともなわせて「これおいくら?」なら「What is the price on it?」が妥当でしょう。とりあえず『英語らしい表現方法』にギアを入れ替える努力もまた、旅の楽しみを増幅させる手だてである。さて、ああこんな旅にも出てみたい、と血湧き肉躍らされるのが甲斐崎圭著『海を喰らう 山を喰らう』。北海道奥尻島で獲った巨大タコにかぶりつき、北津軽で乗りこんだ漁船中にマイタケを求める。吉野の山奥では杓子づくりの職人を訪ねて茶粥を駆走になり、ざつざつとかきこむ。茶粥のその勢いがこちらの舌の上を躍つて、思わずごくりと生唾を飲む。旅仕度のまま憑かれたように訪ね歩く山や川。その自然と人との関わりのなかで喰らいつく食べものは、生命はとばし厳しさの味。食べる者のいのちに直接訴えかけてくるからこそ、このうえもなくうまい。その躍動感あふれる美味の虜になつて、著者は日本中を渡り歩くのである。……おっと、痛たた。チャイもラッシーもサブジもカレーもインドの生命みなぎるおいしさだったけれど、どうにもあとこの旅はひと筋縄ではいかない。あいかわらずおなががちくちくするのが、悔しいやらうらめしいや。